

## 罪のなやみ（一）

甲「釈尊と阿弥陀仏の關係をうかがう前に、私は一つお問いたいことがあるのです。」

乙「それは何ですか。」

甲「じつは私は△に対して一つの罪悪を犯したのです。その△が私に執拗△△しようとするのです。私は後悔しています。しかしどうにもなりません。じつはこういう事情なのですが。………。私はいろいろと考えてみたのです。私の友人に唯物論的傾向の人が多いのですが、それらはあるいはぼくを軽蔑し、あるいは問題にするに足らないじゃないかとあきらめさせ、あるいは罪はないと言いますが、しかしどうしてもおちつけません。このたびぐら困ったことはありません。いったいどうすればいいのでしょうか。」

乙「わかりました。それはあなたが人間である以上、罪の意識によつてお苦しみになるので当然でしょう。それは唯物だの唯心だのという学問の問題ではなくて、じつに人間の問題です。人間である以上、本能の要求をなくすることはできません。それがすなわち生きていくということなのです。しかしどんなに本能生活にただれようとしても、理性の声をどうすることもできません。天空にちらばる星の輝きのあるかぎり、大地に無上命法の声を消すことができません。私どもが本能にただれた次の日は理性の声に悩まねばならないのが事実です。」

甲「では私どもは、その理性の声に悩むことだけが与えられるのですか、そこに生きる道はないのですか。」

乙「お待ちなさい。ずるくそこへ疑いを持つてきてはなりません。放蕩児か人間かの岐路です。」

甲「先生もこうした気持ちで悔まれたことがありますか。」

乙「あります。あなたは今、分水嶺に立っているのです。しかもまだあなたが純であるからこそお悩みになるのです。理性の声は、罪悪を重ねることによって、曇ってきます。悪を平気でくり返すようになることはおそろしいことです。」

甲「私も時に、どうなりとなれ！ もっとやってやろうかという気になります。」

乙「それは恐るべき自暴自棄です。と言つてもそれができますか。」

甲「それもできないのです。私はこれからまじめに生きるぞ！再びこんな後悔するよいうなことはしないとやりたい心さえます。そして許しを乞いたい心でいっぱいです。けれどもそうした心がさめればさめるだけ、私は気でも狂いそうなほど苦しいのです。」

乙「ごまかさずに苦しみをききなさい。そこにだけやがてあなたの更生があります。」

甲「それに私はその△の人からの復讐が怖いのです。どうにかしてそれからさげたいのです。そして小さな私の社会的地位の動揺、および名誉、信用の失われることが死ぬるほどいやで恐ろしいのです。」

乙「その心のおこるのが当然です。でもそれは卑怯です。逃げてみてもそれだけはついてきます。良心の声は、そうしたものを失いそうだから、より烈しくなるのです。」

甲「いったい私はどうすればいいのです？」

乙「ここに人間の進む道に四つあります。」

第一は、できるだけごまかしていいかげんに時の経過を待つのです。どうにかなるだろうと。

第二は、苦しんだあげく、気の小さい人は死んでゆくか、逃げてかくれてしまうかです。

第三は、もつと悪の心を強く動かして、あべこべに相手をやつつけてしまう人です。

第四は、一切を超えて救われる道です。」

甲「その心のすべてが今の私には、かわるがわる頭をもたげるのです。しかしけつきよくは第四の天地を求めているのです。どうしたらいいのです。」

乙「第一の人は、消極的な、あきらめの人で、よく行けば、心の傷も癒え、のど元過ぐれば熱さ忘れる人です。悪く行けば、一生を台なしにしてしまいます。」

第二の人は、逃避の人です。弱い人です。一生おびえつつ流転します。死んだとて無意義です。

第三の人は悪党になりおちて、ついには魂の声もしびれはてて、深い深い破滅の世界に入る人です。

第四の人こそ、こうした罪悪がもとで、これあつたがゆえに、ほんとに生きる人です。

あなたは第一にも、第二、第三にも行き得ないで、今第四の天地にふみ出そうとなさるのです。あなたは、まずこの罪悪からおこるすべての結果を、逃げずかくれず一切を背負いきって行きなさい。」

甲「ハイ……………」

乙「よし、天が地に、地が天になろうとも、あなたの命がなくなろうと、一切をあなたは合掌して受け取らねばなりません。そのことができ得る世界がわかった時、あなたには救いがわかります。」

甲「しかしそれで救われますか、私がもつと善くならなくとも。」

乙「あなたは、なんとという高慢な人でしょうか。あなたは、あなたが過去に造った罪悪の一つでもが、あなたのはからいによつて、つぐないがつくと思えますか。できません。あなたは、あなたが善人になればそれですむと思つても、それで過去の罪悪はどうともなつていませぬ。」

甲「どうすればいいのです。」